二　話

どがの寺でお尚さんが小僧さんどごあずがって、お尚さんというもの、どっがの尼さん、いつも遊ぶに行ぐもんで、そのお尚さんというもの、尼さんと二人で何か尼さんに料理食へたぐって小僧どご買いにやったどせエ。

一番前買へやったば、

「孕女買いに行げど」

言ってやったど、

「せば、どごさ行げばあるものだ」

「象潟の白川さ行げばあるものだ」

って、そして、お尚さんがつかってやったとなぁ、して行ったば、せエば、

「孕女と言えばわがるが」

「孕女と言えばわがる」

って言うなぁで、して、白川さ行って孕女買うどって言ったば重箱たげで行って、買うどって買ったば、してから、孕女って、

何の事を言うもんだが見だぐってよ、象潟から浜きたもんだあげ浜中で見だど、そして見だばよ、最中の焼き立てフワフワでぇうめえー最中あったもんだあけよー、こいたけあるな、お尚さまど尼さまど二人して食ねだろうし、俺さもくれるだろうどおもってしたども、バーと小僧さんにくれねエで、そごそうじせ何んだどって、ろくなものも食わせねで、まず、承諾したもんだろ、くやしくって……。それがら、よほどなったば、今度、カミソリ買え行ったたっと。

「カミソリ買えど」

ってまだ重箱たながしたど、

「カミソリというもの重箱さ、カミソリというもの、頭の毛つら毛つろ剃るものカミソリと言うものだけ」

「まず、カミソリというもの……」

それでも重箱たなえで行ぐ気する。

「どさ行げばあるもんだば」

と言ったば、

「イサバヤさ行げばあるもんだ」

どって、イサバヤサ行ったわげ、イサバヤさ行ってカミソリ買うどって言えばわがるわげ、

「関のお寺がら使わえできたと言えばわがる」

そしてカミソリ買うって行ったば、したらやっぱりまだ、重箱さ入れでゆぐしたもんだど、「カミソリなんだ、まず顔剃るなんだばカミソリと言えば、重箱さ入れるカミソリというものあるも

んだが」、まだ浜中まできて見だば、したば、アユよ、アユのそれこそ、手頃なな、味噌つけだ、それこそ田楽して並ばせで、これ高価な二つしかねえ、これだば俺どさ食わせねな、一匹食うがなぁど思ったけど食ねで寺さ持ってきて「はい」とやったば、一つも食へねでよ、んながら二人して食ったもんだどなぁ、したらいづが今度、象潟のカンマン寺で、お尚さまの会議あるあげ、行べどって、

「小僧〳〵、きょう馬引で行べ」

どって、馬さ乗っていたど、ずっと馬さ乗って行たば、ちょうど俺方の橋の上さ行ったばアユえっぺ泳でいたど

「あら、あら、あのカミソリ泳でら」

ど言ったでばの、

「バカヤロウ、義経の見だごど聞いだごど言わねもんだ。見だごど聞いだごど絶対しゃべねものだ」

と言うけど、

「はい」

と言ったど、馬どご浜で追っかけま、シーシーってぼっていたどご、侍の子で後さついで行ったば、お尚さまのどごから手のげ落ちだもの、見たず知らず、しゃべねで、知らねでだまっている だろせエ「ああ、暑〳〵」、腰がら手のげで顔ふぐと言ったば

「手のげねえ」と言うもの、

「俺どさ、おや、手のげつけできたもの、ねえなぁ」

「んだ、あこに落ちるけども、お尚さま、見だごど聞いだごどし

ゃべながんばって言ったもん」

「ええ、暑〈〉って、この傘じゃまだ、この傘持って行(あ)べ」

と自分で持っていだ傘たながしたど、

「バカヤロウ、見だごと、上がら落ちるもんだら何んでも拾うもんだあげ」

まだずっと行(え)ったば、今度、馬、バタバタとエンコふってよごしたんどや、してがら、上がら落ちるもの拾えどって、お尚さまの傘ちょいとやって、馬のエンコ、えっぺい入(へ)でやって、「はい」とお尚さまさやったど、したば

「とっても、誰、上がら落ちる、だって、こういうもの拾うものだ、バカなやろうだ」

とごんげられだどや

「とても、おめーだば、俺より頭えぐって、とても関の寺さおだって、あどだばためならねしげえ、おめーだば、もう少しええ寺さ行(え)げ」

どって、今夜、別れの料理食うどって、アナゴでらよ、十一、五匹買って、あぶってで食ったど。

「小僧〈〉お前、先取(さぎ)れ、これは何がなぁ」

と言って、アナゴを食べるごどにすると、

「お侍さんだど」

したば小僧

「本当に何か格言言って食ってもえが」

「格言言って食う」

と言ったば、小僧、

「なんもやぁく七やく七〜〜〜」

お尚さん何も言うごどなぐって・・・・・・

今度、とでもおめ1だば俺より頭えぐって、とでもこの寺さだば

おいでおげねどって、どっかの寺さやらえだどや、

とっぴんからりん。